

2004年度 日本經濟史研究所報

第8号

1. 研 究 活 動
2. 出 版 活 動
3. 展 示 活 動
4. 広 報 ・ 交 流 活 動
5. 資 史 料 の 収 集
6. 開 催 会 議
7. 人 事
8. 施 設
9. 2005 年度 事業 計画
10. 日本經濟史研究所規程



2005 年 8 月

大阪經濟大学日本經濟史研究所

所長あいさつ

研究所開所 80 周年（「新経済史宣言」）にむけて

日本経済史研究所所長 本多三郎

近代資本主義が勃興してから 500 年が経過しました。日本資本主義は開国から数えると一世紀半の歩みをとげています。21 世紀に足を踏み入れている今、経済史研究の課題はいよいよ大きく重くなってきています。日本と世界の資本主義が歴史的に構造的に大きな転換期を迎えているからです。

わたしたちが生をうけ、長い一生を全うすることに、なんと大きな困難が伴っていることでしょうか。命を生み、暮らしをつくり営むことの難しさが、今、深まっています。

近代資本主義の 500 年は、アジアやアフリカ、ラテンアメリカの住民の暮らしを犠牲にして発展してきたといえますが、今では、これらの地域の住民が世界資本主義の舞台上で主役を演じ始めてきています。

本研究所は、1933 年 5 月 15 日、代表理事に就いた本庄栄治郎博士や、後の大阪経済大学（本学）初代学長黒正巖博士、後の通産大臣菅野和太郎博士などによって、京の地で産声をあげました。京都北白川の研究所所屋が占領軍に接収されるなど、敗戦後の事情により研究所の図書等の管理が本学に移され、今日の大阪経済大学日本経済史研究所に至っています。

2003 年、本研究所は開所 70 周年を祝うことができました。激動期を乗り越えて今日を迎えることができましたのは、創設者をはじめ、物故された多くの諸先生、諸先輩、多くの大学の関係者の方々、研究所のスタッフをはじめとする本学教職員の皆様のお陰であります。ここに深く感謝いたしますとともに、本研究所がいよいよ大きな課題を背負っていることを肝に銘じているところであります。

開所 70 周年に向けて、1995 年に「経済史研究会」を再開し、1997 年には『経済史研究』を再刊し、70 周年記念事業の最大の取り組みとして、2002 年に黒正巖博士の著作集全 7 巻を刊行しました。これらの取り組みをはじめとして、創設者たちの精神を改めて確認し、戦前の伝統を蘇らせるとともに、新しい事業に着手、構想することになりました。

『経済史文献解題』のデータベース化と国際版の作成、黒正の「道理貫天地」精神を引き継ぐ日本「経世済民」史学の構築、「杉田家文書」などの重要な史料の整理・翻刻、若手研究者の養成などに着手しました。また、戦前に刊行された『経済史辞典』を引き継いだ経済史・経営史辞典の刊行や、「経済史・経営史博物館」を構想するに至っています。

伝統を継承しながら、新しい事業にも取り組み、日本と世界の経済史研究の発展に寄与するために努力する所存です。今後とも皆様のご支援、ご協力を心よりお願い申し上げます。



2004年度の活動経過

1. 研究活動

■ 経済史研究会 (第1土曜日開催、14:00~17:00 本学にて)

- 第36回 2004年4月3日 出席者40名
報告 山本 有造 京都大学名誉教授
「私の「満洲国」経済史研究」
司会 本学人間科学部教授 山本 正 氏
- 第37回 2004年6月5日 出席者12名
報告 服部 民夫 東京大学大学院教授
「東アジアの工業化パターンと経済関係—技術蓄積論からの接近—」
司会 日本経済史研究所所長 徳永 光俊 氏
- 第38回 2004年10月2日 出席者25名
講演 石井 寛治 東京経済大学経営学部教授
「情報の政治経済史—近代日本の場合—」
司会 日本経済史研究所所長 徳永 光俊 氏
- 第39回 2004年12月4日 出席者7名
報告 住田 紘 東亜大学サービス産業学部教授
「気象・太陽黒点と景気変動—その周期性類似に関する一試論」
司会 日本経済史研究所所長 徳永 光俊 氏

■ 日本経世済民史研究会 (14:00~17:00 本学にて)

- 第4回 2004年5月22日 出席者22名
報告 鈴木 亨 大阪経済大学元学長
「西田哲学と経済」
司会 大阪市立東淀工業高等学校 川口 正義 氏
- 第5回 2004年7月3日 出席者22名
報告 松野尾 裕 愛媛大学教育学部教授
「『京都経済学』と戸田海市・黒正巖」
司会 日本経済史研究所所長 徳永 光俊 氏
- 第6回 2004年12月11日 出席者19名
報告 綱澤 満昭 近畿大学文芸学部教授
「農本主義断章」
司会 日本経済史研究所所長 徳永 光俊 氏
- 第7回 2005年3月12日 出席者18名
報告 岩崎 正弥 愛知大学経済学部助教授
「農本主義と地域論」
司会 日本経済史研究所所長 徳永 光俊 氏



報告は鈴木亨氏(第4回)

■ **経世済民研究会** (学内研究会)

第1回 2004年 5月 21日 出席者 8名
報告 土井 乙平 本学経済学部教授
「日本料理と伝統継承—家族形態から見る日常生活文化の伝達と継承—」

第2回 2004年 6月 18日 出席者 11名
報告 黒木 賢一 本学人間科学部助教授
「気の文化と心理臨床」

■ **黒正塾 第2回春季歴史講演会**

応募総数 550名
2004年 5月 15日 出席者 480名
会場：本学A館フレアホール
講師：吉村 昭 氏 (作家)
「歴史小説における史実
—生麦事件とその歴史的意義—」



■ **3大学学術交流記念 第6回 寺子屋「史料が語る経済史」**

応募総数 571名 於：本学 D16 教室
2004年 7月 17日 出席者 256名
師匠：大阪経済大学人間科学部教授 家近 良樹 氏
「最後の将軍徳川慶喜と京都・大坂」

2004年 7月 24日 出席者 167名
師匠：松山大学経済学部教授 川東 暉弘 氏
「日記に見る 20世紀の地域経済史」

2004年 7月 31日 出席者 187名
師匠：東京経済大学経済学部教授 堺 憲一 氏
「経済小説で読み解く戦後経済史」



講師は家近良樹氏

■ **黒正塾 第2回秋季学術講演会**

[オープン・リサーチ・センター採択記念] 於：本学 C館 31 教室

応募総数 340名
2004年 11月 13日 出席者 210名
講師：慶應義塾大学名誉教授 速水 融 氏
「経済史と人口」

2004年 11月 20日 出席者 204名
講師：京都大学名誉教授 上田 閑照 氏
「人間とは何か
—『経世済民』の基礎に向けて」

2004年 11月 27日 出席者 186名
講師：三洋電機株式会社 代表取締役会長 井植 敏 氏
「変革への挑戦—私の経営観—」



上田閑照氏との質疑応答風景

■国際版経済史文献解題作成のための国際研究交流

2005年3月6日～8日

中国社会科学院、世界歴史研究所と研究交流。
研究所より、徳永光俊所長、本多三郎所員、山本正所員、豊田太郎研究協力員が参加。
通訳として文君（本学大学院生）が同行。



■研究助成の申請

- | | |
|--|------------------|
| ●教育学術コンテンツ 【採択】 | ＜日本私立学校振興・共済事業団＞ |
| 研究課題 「経済史文献解題データベース開発」 | 申請金額 4,500,000円 |
| ●平成17年度科学研究費補助金基盤研究(B)〔不採択〕 | ＜日本学術振興会＞ |
| 研究課題 「越前杉田家をめぐる基礎的研究」(4年) | 申請金額 11,030,000円 |
| ●平成17年度科学研究費補助金基盤研究(B)〔不採択〕 | ＜日本学術振興会＞ |
| 研究課題 「日本経世済民史学構築のための「経済史・経営史類語集(シソーラス)」作成」 | 申請金額 15,050,000円 |
| ●平成17年度学術研究振興基金〔不採択〕 | ＜日本私立学校振興・共済事業団＞ |
| 研究課題 「日本経世済民史学構築のための「経済史・経営史類語集(シソーラス)」作成」(4年) | 申請金額 2,800,000円 |
| ●平成17年度科学研究費補助金データベース公開促進費〔不採択〕 | ＜日本学術振興会＞ |
| 研究課題 「経済史文献解題データベース」 | 申請金額 59,030,000円 |

2. 出版活動

- | | | |
|---|-----------|---------|
| (1) 『経済史文献解題』2003(平成15)年版(思文閣出版) | 2004年10月刊 | 11,800円 |
| (2) 研究叢書第15冊
徳永光俊編『黒正巖と日本経済学』(思文閣出版) | 2005年3月刊 | 2,700円 |

3. 展示活動

■黒正巖博士遺墨・遺品展

2004年11月9日(火)～27日(土)
70周年記念館ギャラリー



4. 広報・交流活動

- | | |
|----------------------|---------------------------------|
| (1) 新聞・雑誌掲載記事 | |
| ■『飛脚問屋井野口屋記録』に関して | |
| ①2004. 6. 10 読売新聞(夕) | 「飛脚問屋井野口屋記録」
全4巻刊行 尾張藩御用達の盛衰 |

■経済史研究会・寺子屋などに関して

②2004. 4. 1	朝日新聞(夕)	第36回経済史研究会
③2004. 4. 21	読売新聞(夕)	第6回寺子屋「史料が語る経済史」
④2004. 4. 24	毎日新聞(夕)	第2回春季歴史講演会「黒正塾」
⑤2004. 5. 11	読売新聞(夕)	第4回日本経世済民史研究会
⑥2004. 5. 15	毎日新聞(夕)	第4回日本経世済民史研究会
⑦2004. 5. 18	日経新聞(夕)	第4回日本経世済民史研究会
⑧2004. 5. 29	毎日新聞(夕)	第37回経済史研究会
⑨2004. 6. 19	毎日新聞(夕)	第5回日本経世済民史研究会
⑩2004. 6. 23	日経新聞(夕)	第5回日本経世済民史研究会
⑪2004. 9. 29	日経新聞(夕)	第38回経済史研究会
⑫2004. 11. 9	日経新聞(夕)	第2回学術講演会
⑬2004. 12. 2	読売新聞(夕)	第39回経済史研究会
⑭2004. 12. 8	日経新聞(夕)	第6回日本経世済民史研究会
⑮2005. 3. 10	読売新聞(夕)	第7回日本経世済民史研究会
⑯2005. 3. 26	毎日新聞(夕)	第40回経済史研究会
⑰2005. 3. 31	読売新聞(夕)	第40回経済史研究会

(2) 『黒正巖博士遺墨・遺品展』冊子 (2004年11月9日)

(3) 「日本経済史研究所報」第7号 (2004年8月)

(4) ホームページ <http://www.osaka-ue.ac.jp/nikkeisi/>

5. 資史料の収集

◆購入資料

◇図書	資産性図書	612冊	4,799,435円
	消耗性図書	106冊	292,640円
◇雑誌(17種)		152冊	157,343円
	合計	1,154冊	5,249,418円

◆受贈資料

◇図書	185冊
◇雑誌(63種)	99冊

「杉田定一家文書」の整理と史料目録づくり

杉田定一家文書は福井県出身の自由民権運動家であり、元衆議院議長を務めた杉田定一(一八五一〜一九二九)の蔵書で、一九五六年に本学図書館が寄贈を受けたものである。史料は近世末期から昭和初年におよぶ膨大なもので、地租改正反対運動や自由民権運動に関する史料ばかりでなく、定一が海外視察から持ち帰った史料や個人の漢詩文も含まれている。ちなみに、史料は三八箱に分けられ、ラベル点数は一二、五一六にのぼる。

これらの文書は、二〇〇三年度から図書館と共同事業として、史料の整理、史料目録ならびに史料集の刊行、デジタル化による史料のネット上での公開を目指しており、家近良樹所員を中心に二宮美鈴・上野山学・田原啓祐研究協力員が精力的に事業の遂行にあたっている。外国文献については、松村幸一特別研究所員・六浦英文教授・佐々野卓実助教授・藤井茂・豊田太郎非常勤講師に翻訳を依頼している。

また、毎年二回、集中調査として、延べ数百名の学外の若手研究者の協力を得ている。史料目録は二〇〇六年に刊行予定である。

6. 開催会議

◇第1回運営委員会・所員会議

日時 2004年5月7日(金) 11:00~13:00

場所 日本経済史研究所共同研究室

- 議題 (1) 新所員の紹介について
(2) ポスト・ドクター制度について
(3) 平成16年度事業活動について
(4) その他

◇第2回運営委員会・所員会議

日時 2004年6月4日(金) 11:00~13:00

場所 日本経済史研究所共同研究室

- 議題 (1) 5月の活動について
(2) 6~7月の活動計画について
(3) ポスト・ドクター制度について
(4) その他

◇第3回運営委員会・所員会議

日時 2004年10月15日(金) 11:30~13:00

場所 日本経済史研究所 共同研究室

- 議題 (1) 2005年度予算について
(2) その他

◇第4回運営委員会・所員会議

日時 2004年12月3日(金) 12:00~13:00

場所 日本経済史研究所 共同研究室

- 議題 (1) 次期所長の推薦について
(2) この間の活動について
(3) 来年度の活動について
(4) その他

◇第5回運営委員会・所員会議

日時 2005年3月9日(水) 11:30~13:00

場所 日本経済史研究所 共同研究室

- 議題 (1) 2004年度の活動総括について
(2) 来年度の活動について
(3) その他

◇第1回運営委員会

日時 2004年10月1日(金) 12:30~13:00

場所 日本経済史研究所共同研究室

- 議題 (1) ポスト・ドクターの推薦について
(2) その他

◇第2回運営委員会

日時 2004年12月3日(金) 11:30~12:00

場所 日本経済史研究所共同研究室

- 議題 (1) 次期所長の推薦について



(2) その他

- ◆第1回新版「経済史・経営史辞典」(仮称) 顧問会議
日 時 2004年7月28日(水) 14:00~17:00
場 所 日本経済史研究所共同研究室
出席者 秀村 選三 九州大学名誉教授
作道洋太郎 大阪大学名誉教授
原田 敏丸 大阪大学名誉教授
安岡 重明 同志社大学名誉教授
竹岡 敬温 大阪学院大学経済学部教授
山田 達夫 大阪経済大学名誉教授
徳永 光俊 本学教授 日本経済史研究所所長
山本 正 本学教授 日本経済史研究所員
- ◆『経済史文献解題』データベース入力システム説明会
日 時 2004年8月6日(金) 13:30~16:00
場 所 日本経済史研究所共同研究室
出席者 石川健次郎 同志社大学商学部教授
奥田 以在 同志社大学大学院生
足立 芳宏 京都大学大学院農学研究科助教授
松村 隆 大阪学院大学国際学部助教授
大阪大学杉原薫研究室(久保圭以子)
大阪大学佐村研究室(叙棠)
徳永 光俊 本学教授 日本経済史研究所所長
山本 正 本学教授 日本経済史研究所員
豊田 太郎 ポストドクター
寺倉 寛 次長
法貴 義弘 課長
紀伊国屋書店 他(5名)
- ◆『経済史文献解題』データベースシステム検討会
日 時 2005年3月28日(月) 検索システム検討会
場 所 日本経済史研究所共同研究室
出席者 今野 孝 福岡大学商学部教授
江藤 彰彦 久留米大学経済学部教授
伊藤 淳史 京都大学大学院農学部研究科助手
徳永 光俊 本学教授 日本経済史研究所所長
本多 三郎 本学教授 日本経済史研究所員
西山 豊 本学教授 日本経済史研究所員
豊田 太郎 ポストドクター
寺倉 寛 次長
法貴 義弘 課長
松村 桂子
小澤 知子
平野 早苗
紀伊国屋書店 他(4名)

7. 人 事 (2004年4月1日付)

所 長	徳永 光俊 (経済学部)	
運 営 委 員	本多 三郎 (経済学部)	増村 紀子 (経営学部)
	西山 豊 (経営情報学部)	家近 良樹 (人間科学部)
	寺倉 寛 (研究所事務室)	
所 員	本多 三郎 (経済学部)	大橋 範雄 (経済学部)
	櫻井 幸男 (経済学部)	重森 暁 (経済学部)
	土井 乙平 (経済学部)	藤本 高志 (経済学部)
	吉田 秀明 (経済学部)	西山 豊 (経営情報学部)
	家近 良樹 (人間科学部)	楠葉 隆徳 (人間科学部)
	滝内 大三 (人間科学部)	山本 正 (人間科学部)
	黒木 賢一 (人間科学部)	
特別研究所員	秀村 選三 九州大学名誉教授	作道洋太郎 大阪大学名誉教授
	原田 敏丸 大阪大学名誉教授	安岡 重明 同志社大学名誉教授
	藤本 隆士 福岡大学名誉教授	竹岡 敬温 大阪大学名誉教授
	松下 志朗 九州大学名誉教授	藤田貞一郎 同志社大学商学部教授
	宮本 又郎 大阪大学大学院経済学研究科教授	
	荻野 喜弘 九州大学大学院経済学研究院教授	
	佐村 明知 大阪大学大学院経済学研究科教授	
	野田 公夫 京都大学大学院農学研究科教授	
	今野 孝 福岡大学商学部教授	
	山田 達夫 大阪経済大学名誉教授	
	松村 幸一 大阪経済大学名誉教授	
	渡邊 忠司 佛教大学文学部教授	
研究協力員	岡本 幸雄 西南学院大学名誉教授	
	山本 有造 中部大学人文学部教授・京都大学名誉教授	
	喜舎場一隆 第一福祉大学人間社会福祉学部教授	
	東定 宣昌 九州大学名誉教授	
	水原 正亨 大阪学院大学経済学部教授	
	三上 敦史 大阪学院大学国際学部教授	
	下谷 政弘 京都大学大学院経済学研究科教授	
	瀬岡 誠 大阪学院大学国際学部教授	
	石川健次郎 同志社大学商学部教授	
	杉原 薫 大阪大学大学院経済学研究科教授	
	西村 卓 同志社大学経済学部教授	
	上村 雅洋 和歌山大学経済学部教授	
	宇佐美英機 滋賀大学経済学部教授	
	阿部 武司 大阪大学大学院経済学研究科教授	
	江藤 彰彦 久留米大学経済学部教授	
	澤井 実 大阪大学大学院経済学研究科教授	
	山田 秀 九州産業大学商学部助教授	
	足立 芳宏 京都大学大学院農学研究科助教授	
	原 康記 九州産業大学商学部助教授	
	宮崎 克則 九州大学総合研究博物館助教授	
	武井 章弘 大阪学院大学経済学部助教授	
	鳩澤 歩 大阪大学大学院経済学研究科助教授	
	松村 隆 大阪学院大学国際学部助教授	
	木山 実 関西学院大学商学部助教授	

	福岡 正章	同志社大学経済学部専任講師		
	楠本美智子	九州大学九州文化史研究所助手		
	新鞍 拓生	九州大学石炭研究資料センター助手		
	山口 信枝	福岡県地域史研究所研究員		
	藤本 俊史	福岡大学研究推進部大学史資料室		
	後藤 正明	福岡大学研究推進部大学史資料室		
	植田 知子	京都学園大学非常勤講師		
	関谷 次博	帝塚山大学非常勤講師		
	豊田 太郎	大阪経済大学非常勤講師		
	伊藤 淳史	京都大学大学院農学研究科		
	上野山 学	同志社大学大学院経済学研究科		
	諸原 真樹	福岡大学大学院商学研究科		
	奥田 以在	同志社大学大学院経済学研究科		
	酒井 朋子	京都大学大学院農学研究科		
『経済史研究』	石川健次郎	(同志社大学)	今野 孝	(福岡大学)
編集委員	江藤 彰彦	(久留米大学)	佐村 明知	(大阪大学)
	柴 孝夫	(京都産業大学)	徳永 光俊	(大阪経済大学)
	水原 正亨	(大阪学院大学)	渡邊 忠司	(佛教大学)
事務室	寺倉 寛・法貴 義弘			
	松村 桂子・小澤 知子・平野 早苗			

所員の動向

●本多 三郎

19世紀後半のアイランド土地闘争、就中、1870年代末から80年代初めにかけて未曾有の規模で展開されたアイランド土地戦争と、その背景にあった、「世界の工場」イギリス資本主義の再生産構造の一環に組み込まれつつあったアイランドの農業土地問題・移民問題を研究している。現在、中間報告『アイランド土地問題—大英帝国の陰』(仮題)をまとめつつある。昨年7月から9月にかけて3ヵ月間、アイランド現地で調査研究したが、最新の研究動向を一応つかみ、望んでいた史資料も入手できた。

●櫻井 幸男

1980—2000年までの労働市場の変容をイギリスの資本蓄積の変化から解明する、2002年『現代イギリス経済と労働市場の変容』を出版して以来、1997年成立したブレア政権下の経済・労働・福祉政策がどのように労働市場に影響を与えるのかを研究しています。1990年代以降、とりわけグローバル化の視点とEU統合の視点から労働市場を問い直す必要に迫られています。歴史というにはあまりに現代的過ぎで、生煮えの部分で悪戦苦闘しています。

●家近 良樹

去年の5月から、前々から執筆依頼のあった徳川慶喜に関して原稿を書き進める作業に従事しました。その結果、去年(2004年)の9月に『徳川慶喜』(吉川弘文館)を出版する運びになりました。また今年の1月には、『その後の慶喜』(講談社選書メチエ)も出しました。これで徳川慶喜の77年に及んだ生涯を一応たどることが出来ました。よろしければ、目を通して下さい。お願いします。

●山本 正

イギリス諸島の三王国と大西洋の彼方の西インド諸島および北アメリカ大陸における諸植民地で形成されることになる帝國的な政治体(政治システム)として近世イギリス大西洋帝

国を捉えたうえで、これを構成する王国／植民地のアイルランドが、この政治体（システム）のなかでいかなるポジションを占めたかという問題関心のもと、近世アイルランド史にアプローチしています。3年前には研究所から助成金をいただいて『王国と植民地—近世イギリス帝国のなかのアイルランド』を上梓しましたが、そこでは、一応近世全体をカバーしたものの、16世紀のテューダー朝期を扱った部分に比べ、17世紀以降が内容的に薄くなったきらいがありました。そこで、もっかのところは、17世紀半ばのイギリス諸島における動乱—かつてはもっぱら、イングランド中心主義史観の濃厚な「ピューリタン革命」という用語で呼ばれていたが、近年は「三王国戦争」という用語が定着しつつある—に焦点を定めつつ、上記の問題関心にもとづく具体的な研究課題が設定できないものかと、あれこれ考えているところです。

●西山 豊

2005年4月から1年間、ケンブリッジ大学で在外研究することになりました。研究室はCentre for Mathematical Sciencesにあります。仕事はこれまで書いてきた論文や記事の英語への翻訳、雑誌「理系への数学」の連載原稿の執筆、新しい研究テーマの発掘などです。「数の文化史」『経済史研究』第8号でも述べましたが、最近は数学と文化や歴史の関係に興味を持っています。たとえば、数字を指で数える場合、日本人は人差し指から始めますがフランス人などヨーロッパでは親指から始めます。これ以外に小指から始める国もあります。同じ地球上に生まれながらどうしてこのように違うのか、その進化の過程を数学史、言語学、手話言語、食文化、生物学、気候や風土などさまざまな角度から調査、検討してその秘密を解き明かしたいと思っています。

●藤本 高志

経済史とはあまり関係がないかもしれませんが、取り組んでいる研究を紹介します。

一つは、日本の食料自給率に関する研究です。2000年度、日本の食料自給率は40%へと低下しました。これは、先進国の中では最低水準です。BSEなど最近の食関連事件も相まって、日本の市民は食料の自給と安全性の改善の必要性を感じるようになりました。このような中で、地域で生産し地域で消費しようという「地産地消」の表現がマスメディアで使われることが増えました。そこで、①地域で生産された食料がどの程度地域で消費されているかの指標としての地域食料自給率を計測する研究を行っています。また、日本の食料自給率が低下した重要な要因に食生活の変化があります。米の消費が減少し、畜産物の消費が増加してきたのです。畜産物の飼料がほとんど輸入であるため、自給率が低下してきたのです。このような中で、最近注目されているのが、日本の風土に適した稲を家畜の飼料とする試みです。そこで、②飼料用稲を基軸とする耕畜連携システムの確立が自給率、農村経済、環境に及ぼす影響を評価する研究を行っています。

二つは、里山の保全に関する研究です。かつての里山林は、キノコや木の実、肥料や飼料となる草、燃料となる薪を採取する場でした。村落共同体の構成員が平等に利用する入会地として、共同利用されてきました。里山林は、このように利用されることで生物多様性を増しました。しかし、農業活動や生活の近代化に伴い、森林に依存することがなくなった現代、里山林は放棄され、鬱蒼とした草木に覆われ、人間のアクセスを拒むようになり、生物多様性も低下しつつあります。しかし、緑に対する国民の関心が高まる中で、人々が里山へのアクセス権を得ると同時に、林道や歩道を整備すれば、里山林は住民のリクリエーションの場として新たな価値を持ちます。そこで、京都府南部地域の全ての里山林班を対象に、GISを活用し、リクリエーションを目的とする整備・保全がもたらす潜在的便益を評価する研究を行っています。全ての林班の潜在的便益を地図に落とせば、どの里山林を保全すべきかの政策決定を支援することができます。

●吉田 秀明

日本の電機企業を研究しています。ついこの間まで、と言っても15年以上前なのですが、

日本の電機企業は自動車と並んで飛ぶ鳥を落とす勢いでした。私がテーマにした「総合製作」（電機製品なら何でも造る、というような考え方、自動車で言えばフルライン生産）も成功の代名詞だったのです。ですが、今では企業は低空飛行。「総合製作」は一刻も早く忘れてしまいたい過去の亡霊みたいなもので、まあ言ってみれば「共産主義」とか「消費は美德」というような言葉の親戚みたいなものになってしまいました。

しかし、そうすると「いや、そうとばかりもいえないでしょう」というのが天邪鬼な私の性向。過去の追憶にすがって研究してます。

●土井 乙平

日本料理の店舗経営を含む広義の伝統産業を研究対象にして、伝統産業発展の方向を探る調査と研究に取り組んでいます。この研究を開始した時点で、伝統産業の発展を多世代同居の日本的家族形態との関連において見ていくという視点を確定していました。その視点の正しさは、その後の調査研究で明らかになりました。伝統産業は、現在も家内工業の小規模生産形態を採り、簡単な道具を使用した高度技能による高品質商品の生産と販売を行っています。その伝統産業が高度に発達した商品生産社会で生き残っていくためには、伝統的技法の伝達と継承を正しく行わなければなりません。

職住分離の推進と核家族化とが、伝統産業の発展を阻害しています。伝統の伝達と継承は日常生活を基盤にして日常生活文化の伝達と継承の中で行われるため、職住分離をした職場では、日常生活と密接に関連した伝統的技法を伝達する余裕がなくなり、単なる技術に矮小化した伝統的技術の伝達になってしまいます。また核家族形態は、日常生活文化の世代間伝達を家庭で日常的に行う基盤を喪失しています。今後は、日本的伝統や日本的家族について日常生活文化との関連で考察しながら、日本文化論の視点と商品生産論の視点との調和と統合を図るという立場から、日本の伝統産業の発展について考えていきたいと考えています。

●滝内 大三

本多所長から、新版『日本経済史辞典』の「教育」に関する項目選びに、何か提言をするようにという指示を受けた。日本経済史研究所の一大事業とも言うべき辞典編纂にかかる並々ならぬ所長の決意を前に、断る言葉を失った私であった。この機会に日本の経済・経営と教育の関係を歴史的に問い直すことは、間違いなく私の研究の幅を広げてくれるであろう。とはいえ日本経済史はむろん、日本教育史の知識も乏しい人間に大それた提言などできようはずもなく、ひたすら諸先生方の教えを請うというのが率直な気持ちである。

●黒木 賢一

私の専門は臨床心理学です。臨床心理学は主に欧米を中心として発達してきた学問ですが、日本で心理臨床をしていると欧米中心の理論や実際がそぐわない場合があり、自文化に根ざした「心理臨床とは何か」を模索するようになりました。その結果として、東洋の〈気〉という概念に辿り着いたのです。東洋を背景とした日本語文化の中で、気の問題を無視することはできません。気には心理的力動、身体感覚、人間関係の機微、自然との関わりがクロスオーバーされているからです。このような気の問題をいかに心理臨床に取り入れ、理論化し、実践に役立たせるかが私の研究テーマです。

●徳永 光俊

研究所長を3月末日でもって退任しました。在任中は、多くの方々にお世話になり、ありがとうございました。ほっとしているのもつかの間、新しい仕事に追われている日々です。

研究は思うように進んでいませんが、『社会経済史学の誕生と黒正巖』（2001年）に引き続き、この5月に『黒正巖と日本経済学』を上梓することが出来ました。『黒正巖著作集』全7巻（2002年）を含めて、黒正史学を再検討していくための土台を据えることが出来たのではないかと思います。

研究テーマとしては、西田幾多郎を軸とした日本哲学と経済史・経済学とのかかわりを追

求していきたいと思っています。いつ果てることもない大きな課題ですが、日本アジア農業史や黒正巖の仕事を素材にしながら、地道に取り組むつもりです。当面、『日本農法の心土』として、出来るだけ早くまとめたいと思っています。

8. 施設

所在場所	G館1階・地下室
使用室名	所長室、共同研究室、古文書室、 事務室、書庫（地下室）
使用面積	197.76m ²
所長室	(19.76m ²)
共同研究室	(39.66m ²)
古文書室	(30.28m ²)
事務室	(108.06m ²)



9. 2005年度の事業予定

研究活動

■経済史研究会（4・6・10・12月の第1土曜日開催。場所はいずれも本学）

第40回 2005年4月2日 出席者30名
報告 ダブリン大学トリニティカレッジ名誉教授 ルイ・マイケル・カレン氏
“Sakoku, Tokugawa policy, and the interpretation of Japanese history”

第41回 2005年6月4日 出席者17名
報告 大阪大学大学院経済学研究科助教授 中林 真幸氏
「近代資本主義の組織—製糸業の発展における取引の統治と生産の構造—」

第42回 2005年10月1日
書評 大阪市立大学大学院経済学研究科教授 大島 真理夫氏
本学経済学部教授・日本経済史研究所員 徳永 光俊氏
秀村選三著『幕末期薩摩藩の農業と社会
—大隅国高山郷土守屋家をめぐって—』（創文社 2004年10月刊）

第43回 2005年12月3日
報告 京都大学大学院経済学研究科教授 岡田 知弘氏
テーマ未定

■日本経世済民史研究会（開催場所はいずれも本学）

第8回 2005年6月11日 出席者16名
報告 京都大学人文科学研究所助手 藤原 辰史氏
「ナチス農本主義の諸特徴」

第9回 2005年10月8日
報告 京都大学大学院農学研究科助手 伊藤 淳史氏
「満洲」移民・戦後開拓・戦後移民—農業移民の戦後—」

■日本経済史研究会

第1回 2005年7月1日 於：日本経済史研究所共同研究室 出席者 11名
報告 人間科学部教授 滝内 大三 氏
「教育史から見た経済史・経営史辞典」

第2回 2005年9月16日 於：日本経済史研究所共同研究室
報告 経済学部教授 泉 弘志 氏
「統計学と日本経済史・経営史辞典」

■第3回春季歴史講演会（於：C館31教室）

2005年5月7日 講師：中村 隆資 氏 出席者 206名
「歴史小説における神と人」

■第7回 寺子屋 史料が語る経済史（於：C館31教室）

2005年7月16日 師匠：大阪経済大学経済学部教授 徳永 光俊 氏 応募総数 334名
「黒正巖と日本経済学—道理貫天地をめぐる—」 出席者 157名
2005年7月23日 師匠：松山大学経済学部助教授 渡辺 孝次 氏
「東西交流—今と昔—紅茶と砂糖をめぐる—」 出席者 154名
2005年7月30日 師匠：東京経済大学経済学部教授 福士 正博 氏
「歴史学における『市民』という言葉—近代の再検討—」

出席者 158名

■第3回秋季学術講演会（於：C館31教室）

2005年11月12日 講師：立正大学教授 黒田日出男氏
テーマ：「16世紀の大転換について」
2005年11月19日 講師：本学元学長 鈴木 亨氏
テーマ：「人生の究極の支えは何か」

出版活動

- ◇『経済史文献解題』2004年版（思文閣出版） 2005年9月刊行予定
- ◇『経済史研究』第10号 2006年3月刊行予定
- ◇所蔵古文書目録 第5集 2006年3月刊行予定
- ◇『日本経済史第10文献』 2006年3月刊行予定

寄贈品

- ◎宮本又郎氏 掛軸（1幅）
- ◎黒正 清氏 黒正巖博士愛用机・椅子、詩を記したノート（1枚）
- ◎黒正 明氏 掛軸（1幅）
- ◎原 譲氏 留学日記「欧米の二年」、写真（17点）